

草れづれつ和令

外交評論家・元外交官

金子熊夫

kaneko@eeecom.org



前回(2月8日)の続きですが、私が、外務省傘下の日本国際問題研究所の所長(代行)をしていた1980年代半ばの思い出の中で、もう一つ、どうしても忘れられない出来事があります。

若い中国人研究者の不審死

かねてから日中の学者、研究者や若い外交官同士の交流促進を重視していた私は、上海の国際問題研究所を訪問した折、そこで若い優秀な日本研究者S君を見つけ、日本に特別研究員として招聘(しようへい)しま

した。日本語は完璧に近く、しかもハンサム、今流に言えばイケメンで、研究所の女性職員たちにも人気がありました。S君を教師にして中国語会話クラブを開き、私も参加しました。時々拙宅にも呼んで、家族ぐるみで付き合っていました。川崎市の多摩川沿いの彼の自宅アパートに招待されたときは、新婚早々の美

好意的計らいで、中国国内を自由に旅行し取材できたということです。当時北京で大使をしていた故中江要介氏(私の本舎条約局と旧南ベトナム日本大使館で直屬の上司として仕えた大先輩)から直接聞いたことですが、山崎豊子自身も、「大地の子」のあとがきでそのことをはっきり書いています。特に印象的なのは、「中国を美しく書かなくて結構、中国の欠点も暗い影も書いてよろしい、それが真実であるならば、真実の中日友好にならば」と励まされたというところで、絵書記の人間的魅力と懐の深さが如実に感じられるエピソードです。

中国とどう付き合っていくべきか

体験的対中外交論(その2)

人の奥さんの手料理をこ馳走になったこともありますが、あの頃には、やはりそのうななかと思えますが、確認がないまま、この件は未解明の不審事件として私の記憶の中に鮮明に残っています。かげがえのない人材を失ったこと、は今でも残念です。

日中蜜月時代の思い出

今思えば、この時代は1972年の国交正常化以後で、日中関係がベストの時代だったと思えます。建国第一世代の毛沢東、周恩来が相次いで死去(1976年)し、文化大革命もようやく終息。代わって復権した実力者・鄧小平が、改革開

放政策を打ち出し、開明的な胡耀邦が中国共産党の総書記、趙紫陽が首相に就任。さらに、日中平和友好条約調印(1978年)で日中関係は一気に蜜月時代を迎えました。この時期、私は公務で頻りに訪中しましたが、行くところはどこでも大歓迎を受け、私もすっかり中国風(びいき)になりました。行く先々で即興で我流の漢詩を作り、酒席では日本式に吟詠して拍手喝采をもらったこともあります。北京では、旧知の錢其琛氏(後の外相、副首相)の好意で、国賓級の賓客しか招待されないといわれる中南海の釣魚台での晩餐会にも招かれたりしました。他方、東京・世田谷の拙宅には、中国大使館のお歴々や訪日した中国の要人がよく遊びに来てくれました。

余談ながら、丁度その頃、作家の故山崎豊子は、中国残留孤児を主人公とする小説「大地の子」のための取材で訪中していましたが、それまで彼女の取材受け入れを頑なに拒否していた中国当局は、胡耀邦総書記直々の

(2面に続く)

令和つれづれ草



金子熊夫

瀋陽での 衝撃と癒し

ちなみに、この残留孤児問題については、その後、私自身が瀋陽（旧満州の奉天）を訪れた時のことも書いておかねばなりません。周知のよきこと、瀋陽郊外の柳条湖は、1931年9月18日（そこで旧日本軍による鉄道爆破事件が起き、日中15年戦争勃発の契機となった）ところですが、その現場に「9・18歴史博物館」が建っています。建てたのは、胡耀邦の後を継いだ江沢民政権時代で、江直筆の「勿忘国耻」の4文字が正面の外壁に大書されており、館内には、日中戦争時代に日本が犯したとされる様々な残虐行為が蝸（こ）人形や現場写真などを使って生々しく展示されています。

複雑な歴史を振り返るとき、忘れてはいけない1つの視点であると強く感じました。

胡耀邦時代について、ついでにもう一つ特筆しておきたいことは、彼が1983年に来日した際、日本の青年3000人を中国に1週間招待するプランを披露して日本側を驚かせたことです。また、中曽根康弘首相と

して唯一広島島の原爆ドームなどを視察しています。このような指導者が1980年代の中国に実際にいたということは記憶しておかなくてはなりません。

当時、私も、おそらく多くの日本人と同様、日中友好関係はこのまま胡耀邦―趙紫陽体制の下で順調に発展し続けるものと楽観していました。そ

中国とどう付き合っていくべきか

時とは、「兄弟のよう」に非常に親しい仲だったと自ら述懐しており、来日中には中国の首脳と



ところが、胡耀邦の政治改革は、保守派の強烈な巻き返しに会い、徐々に勢力を失い、ついに1



天安門で戦車に立ち向かう学生



天安門広場の夜景

近年の中国共産党の態度、とりわけ香港の民主化運動弾圧、国内の少数民族の処遇、東・南シナ海での強権的態度、さらに、前回の拙稿の冒頭で触れた新型コロナウイルス感染症問題への取り組み方や、えげつない「戦狼外交」等々を考えると、30年前の日本の対中外交は、果たして妥当であったと言えるのかどうか。厳しい歴史的再評価を免れないと思います。

もし日本も対中 制裁していたら

こうした30年前の日本政府の一連の判断が正しかったかどうかについては、様々な見方があり、現在でも議論が分かれるところです。あの時欧米諸国と一緒に叩いておくべきだったという意見もあ

たが、中国の国際社会での地位は低下したまま、その後の飛躍的な経済発展は不可能だった。少なくとも20年か30年は遅れていたかもしれない。

エネルギー戦略研究会会長、元国連環境計画アジア太平洋地域代表、元東海大学教授（国際政治学）、新城市出身、84歳。